



セックス♡♡が
推奨される世界

Vol. 4

実家が太いタイプの美術教師 を言葉責めや羞恥プレイをし て天国絶頂させてあげる話

Vol_4

茅積

目次

イラスト	4
この世界は……	6
この世界は教師も顧客	8

イラスト



【美術教師】 久米

この世界は……

この世界では、「セックスが推奨されている」。

なんでも、性的なことに潔癖になりすぎた結果、ひどく人口が減って——国力が落ちたらしい。それも、世界的に。

そんなことがあったものだから、その反動で、逆に性的なことがオープンに、そして日常的なものになった。

セックスとは、隠れて行いう夜の秘密ではなく——日の下であけっぴろげに話題に出すものへ。

——男は性欲的に、女は淫らに。

そんなセックスが推奨されている——またの名を「貞操観念が終わっている世界」に生まれた前世持ちの男——たつみ異リヨウ。

そんな男が、やむにやまれぬ事情で、同級生に始まり、教師や大企業の社長まで、さまざまなひととセックスしていることをする、これは、その多忙な日々の物語である。

この世界は教師も顧客

寒さは随分と遠ざかり、柔らかな日差しが教室を照らす。そう時も経たないうちに今度は暑さを感じはじめるのだろう。午睡の誘惑に抗いながら俺は筆を取っていた。

午後の一歩の美術の授業。選択授業のひとつ。他には技術や書道もあったが、前者は金がかかり、後者は毎度習字道具を学校に持ってくるのが面倒だった。そういうわけで、俺は金も道具も必要ない美術を選択している。それっぽいテーマと共に絵を描くようにと言われてから何度目かの授業。芸術ってやっぱりよくわからないな、と思いつながら、俺はぺたぺたとキャンバスに色を塗っている。

昔、知り合い？ お得意さん？ に美術館やらオーケストラやらに連れ

回されたので知識だけが入っているものの、それを観賞する感性までは育たなかった。

きれいなものはきれい。みにくいものはみにくい。だが、それだけ。

それで腹が膨れるわけでもなし。芸術で心を揺さぶられるという経験をしたことがない。

教室中をゆっくりと回って生徒一人ひとりにアドバイスをしていた教師——久米——が俺の横に立った。

ここはこうするといいたとか、こうした方がよいだとか、そんなことを言われる。自分よりもよっぽど詳しく情熱もある専門家の意見に異を唱えるほどの執着はない俺は、それに神妙な顔を作ってうんうんと頷いた。うなず久米は俺の様子に満足そうに微笑んで——そつと耳元に唇を寄せた。

「今日は、よろしくお願いしますね」

そして肩を意味深にそつと撫なでて、何事もないように次の生徒に足を向けた。

そういえば今日のカレンダーのトップには彼の名前があったなと思ひ出す。彼からは初回の授業以降、もう片手で足りなくらいの回数、予約が入っている。

……ちなみに教師が生徒とそういうことをするのは、いちおう合法である。

この世界のセックスの認識は、マッサージと同じようなものだ。やり過ぎれば害になるが、やった方が体に良い。この認識なので、教師と生徒がセックスしても咎とがめられない。

とはいえ、自由に、というわけでもない。

当然だ。学校という集団において教師は生徒の上に立っている。ゆえに

生徒の意思を曲げて命令することも容易であり、それはセックスについても同様だ。

いくらセックスが推奨される世界とはいえ、強要は犯罪である。特に立場が上の者から下の者への強制は罪が重くなる。暴力と同等と見なされるからだ。

しかしきちんと手続きを踏めば問題ない。つまり、マッチアプリで正式に教師と生徒でセックスを行うという契約をすればいい。

この場合、金が発生することもあれば、無償で行われることもある。前者が俺と久米の関係で、後者は主に教師が生徒にセックスを教える時の話だ。

でもってマッチで生徒と教師が契約をした場合、それは長期間記録が保存され、なにかあった際に白日の下へさらされる。つまり卒業後に訴えら

れた場合はほぼ勝てないということだ。

そして生徒の方も、もしもなにかあればアプリ内で通報もできる。これは通常の契約でも同じなのだが、生徒と教師の場合はより迅速に対処されることとなる。

その上、教師と生徒でセックスを行う場合はマッチでの契約を義務付けられている。『推奨』ではなく『義務』だ。そしてこれを怠ると教師の方が処罰される。

まあ悪用しようとするかどうかともなるが、そんなものは他のなんにだって言える。この運用で大きな問題は起きていないので、現時点では悪くはないものなのだろう。

しかし合法とはいえ、教師が金を払ってのセックスはあまり褒められたことではない。教え導くのが教師であって、つまりマッサージを教えるべ

きは教師であって、生徒に教わるものではない、ということだ。

だがまあ、合法ということは許されているということだ。俺としては教師は同校の学生のように学割ではなく通常料金を支払ってくれるので悪くない顧客といえる。

特に久米は、金払いのいい客だった。

※※※

久米は、その生徒のことを、ひとめ見た時から気になっていた。

四月。新入生が入学してくる月。

そんな月の二週目。初めての美術の授業で、おろしたての制服を纏まとった初ういうい々しい生徒の群れが、久米の待つ美術室へとやってくる。その中に、彼

はいた。

すっと伸びた鼻筋。涼やかな目元。高い背。

彼は整った顔立ちをしていた。実際、よく人を惹き付け^ひるらしく、廊下ですれ違う時にはいつも誰かしらが側にいる。

だがその頃の久米はまだ、彼を描いてみたいと思う程度だった。うつくしいものは絵に残したい。芸術家に当然備わっている衝動だった。

しかしそれが変化したのは、彼が久米の担当する美術を選択して、久米の生徒として美術室に足を踏み入れたときだった。

久米は美術を愛している。たかだが選択できる授業のひとつに選んだだけの学生の中に、その真髄を理解したいと願う者がどれほどいるかというのは分かっているが、それでも選択したからには少しでも興味を持ってほしいと思う。

初回の授業。久米はいつものように生徒に美術の魅力を語った。

つまらなそうにする者。なにか別のことを考えている者。きちんと話を聴いてくれる者。

様々な生徒がいる中で、彼は一番最後の人間だった。顔を上げて、隠しきれない熱の籠る久米の言葉に面白そうに耳を傾けている。

久米は嬉しくな^{うれ}って彼と目を合わせた。そして——目を離せなくなった。彼はきつと芸術に興味がない。しかし、それをしている人間には興味がある。

空疎と興味が混じった瞳だった。そしてさみしげな冷たさも感じた。

彼のことを言語化するの^は難しい。ただ確かなことは、久米が彼の瞳を見て、彼に囚われてしまったということだった。

久米はその日のうちにマッチを通じて彼に予約を取った。生徒の大半は

予約を閉じている——つまり商売をしていないが、彼は違った。それは幸運なことだった。

その翌日には予約は承認された。久米は小躍りして喜んだ。

そして翌週の放課後、彼に抱かれた。学生とは思えないほどの技巧で、久米はすっかり彼の虜になった。

きれいな手。繊細に動く指先。耳元で囁かれたときの低い声。潤んだ目で見上げた際の彫刻に血が通ったかのような顔。容姿、振る舞い、言葉が人を惹きつける。

そのくせ、近づこうとすればするりと逃げる。そしていつだって瞳の奥にはさみしげな色がある。

彼は、近づけば蛾の翼を溶かす太陽であり、水車小屋の乙女であった。

彼はひとの話を聞くのがうまい。自分が知らないものを拒絶するのでは

なく、受け入れ、時に知識を得るために行動する。話をしていたとても心地よい相手だった。

久米は自分で言うのもなんだが、芸術を愛している。そしてどちらかというと創る側の人間ではなく、所蔵する側の人間である。

己を魅了する美術品と同じものを自らの手で生み出せたら、と思った時期もあったが、大学で久米よりも才能にあふれる者たちを見て、その熱はすっかりと冷めてしまった。それでも芸術の近くで生活したいと学校の教師をやっている。

久米の実家は裕福だ。久米が大学に進学した祝いに不動産をぼんと渡してくるくらいは。そして就職時に、もっと良い不動産を再び渡されたくらいには。

だから金には余裕があった。教師を辞めてもまったく困らないほどに。

そして気に入りの相手の時間を頻繁に買っても負担にならないくらいに。

だからはじめは気に入りのものを味見してみたい程度の好奇心だった。しかし久米はすぐにのめり込んだ。同時に、彼に週に一度、時に二度の頻度で予約をするようになった。

けれど彼はしばらくしてそれを拒否した。

月に一度。それ以上はマッチングさせずに断りの連絡が送られる。

久米は納得できなかった。どうして自分ではダメなのだと思った。問いただした久米に、彼は淡々^{たんたん}と答えた。

予定がある。他に客がいる。ひとりの人間だけを鼯^{ひいき}することはない。入学して最初こそ客が少なかったが、今はパンクするほどいる。だからひとりの客を短い間隔で受け入れるつもりはない。

だが久米は彼の答えに頷くことができなかった。

だから自分の持てるもので勝負した。金だ。彼の提示する金額よりも多い金額を提示して、彼の時間をもらおう、と。

今思い返せばずいぶんとはしたない真似をした。けれどその頃の久米は完全に浮かれていた。マッチで学生が金を提示するのはバイトのようなもので、つまり突き詰めれば金がほしいからそうしているのだ。この提案に感謝するだろうとさえ考えていた。

けれど結果は変わらず。増額の提案をしたメッセージごと、その予約は拒否された。

納得できずに授業終わりに準備室に連れ込んだ久米に彼は薄く笑って首を振った。

「悪いが、金を増やしても承認しない」

「どうして？ 君はほとんど毎日働いているんでしょ？ だったら僕が

倍出すから、その時間を休息に当てれば……」

「せんせ、金の問題じゃない」

「じゃあ、どういう……」

「客は俺が選ぶ。いまのところ、同じ客を週に何度も受け入れるつもりはなくてね。だから先生の予約も月イチくらいにしてくれるとありがたいかな」

「そんな！ 月に一回なんて……！」

どうにか懇願して月に二度にしてもらった。じゃあね、と手を振られて、次のことを想って心が弾んだ。

同時にすっと冷える心地もした。彼は自分以外にも客がたくさんいるのだ。だから久米の提案に首を振る。そして彼と久米の関係において、優位に立っているのは彼の方なのだ。久米が頼んで、彼が許す。それではじめ

てマツチングする。誰を客にするかは彼が選ぶのだ。だから彼の不興を買えば隔週の予約だって受け入れられなくなるかもしれない。

そんなことを考えて、金を直接渡せないならばと久米はプレゼントを用意した。学生ではかなり節約しないと手が出せないようなブランド物の財布。それを情事の前に渡して、わくわくと彼の反応を待った。

彼はプレゼントに驚いた様子を見せ、包み紙の中から現れたブランドのロゴを見て、中身を見ずに久米に返した。どうして、と動揺する久米に、彼の目が笑みの形を作る。

「お金で、俺の心を買いたいのか？」

苦笑いで、冗談のように。それがいいとも悪いとも言われなかった。しかし冷えきった目が久米を射抜く。たしなめられた。それも久米よりもずっと若い青年に。

金で彼はなびかないと知ったはずなのに、また同じ過ちを犯したのだ。そして自分がその時まで、誰かの心は金で買えると傲慢にもそう思っていたことを自覚した。

金は人間関係を円滑にする薬だ。多少の粗はプレゼントと称した貢物で消せる。

実際、久米は教師らしいとは言えなかったが、たびたび海外の有名ブランドの菓子を土産として職員室に置いているので、教師間の評判は悪くない。

嫌な役割——衣替えの時期に生徒の服装や態度などをチェックする期間があり、当番になると早朝から校門に立たなくてはならなくなる——は嫌そうな空気を出して曖昧に笑っていれば久米以外の誰かに押し付けられる。投資のようなものだ。それは久米にとって、ごく当たり前のことだった。

そして気に入りの生徒にプレゼントを渡すことも、久米にとっては特別なことではなかった。

たとえばそのプレゼントがその後、使われても質に入れられてもいい。その対価として久米に優しくしてくれるようになるのであれば。

しかしそれを真正面から拒否されて、そしてやわく諭された。

——俺は違う。だからこれは受け取らない。

一線を引かれたとも言える。久米と彼の関係はあくまでビジネスであつて、心をやり取りするものではないと。久米から金を受け取る対価に彼はサービスを提供しているのに過ぎないと。

素知らぬ顔で受け取る方法もあっただろう。搾るだけ搾り取って、出がらしになれば捨てればいい。

それでも彼はきちんと一線を引いた。そしてそれはこと久米においては

幸運だったといえる。一步引いて、己の立ち位置を自覚したから。

自分が溺れるわけがない。そう慢心していた久米を正したのだ。

サービスの提供者として彼は完璧だった。

値段に見合ったサービスを提供する。客が“次”を願うようなそういうものを。

この値段でこれならば、もっと上乗せしたらどうなるのだろうかと思えるのが当然だ。

しかしそれはきっちりと断られ、線を引かれている。その線を踏み越えれば、客ではなくなってしまう。

だから久米は、それに従うしかないのだ。

※※※

放課後の美術準備室。

己の城で、久米はキャンバスに向き合って鉛筆を動かす。まだ描き始めたばかりで簡単な線しかないが、そこには窓際で微笑むあの子の横顔があった。

写真は精巧だが、あの子の雰囲気を取り取るのは難しい。やはり絵でない、と最近思い立ったのだ。

数度のノック。久米は手を止めてキャンバスに布をかけた。まだ下書き未満でしかないので人物の判別はできないだろうが、さすがに本人に見られるのは恥ずかしい。

返事をする、するりと端正な男子生徒——たつみ異が部屋に入ってくる。予想通りの相手に久米はぱっと顔を輝かせた。

事前に整えた席に彼を座らせ、紅茶を出す。飲むように促したが、それよりも先にスマホを出される。久米は苦笑して支払いをした。きちんと取引が完了していることを確認してから、彼は慣れた様子でカップを取った。巽は必ずはじめにマッチでの決済を行う。久米は行為の後でも支払いを渋るつもりはない。過去にそう言ったこともあるけれど、「これは決まりなのだ」と彼は笑って久米の言葉を退けた。

正直に言ってあまり好きではない。久米と巽の関係が商売であることを現実に突きつけてくるものだから。

もちろん、久米はこの関係がただのビジネスであることは分かっている。分かっているが、雰囲気は楽しみたいじゃないか、というのが久米の正直な気持ちだった。

久米が買っている彼の時間はもつとも長いプランのものだ。少々値は張

しょうしょう

るが久米に出せないほどではない。金のない学生ならば学割をつかってなお最短のプランを選んですぐさま行為へ向かうのかもしれないが、久米としてはそこに進む前にちょっとした雑談でもして雰囲気を作りたいかった。

「どうですか？」

「おいしいよ。いつもありがとう」

久米が自分のカップを握りながら問いかけると、巽はにこりと微笑んだ。紅茶は久米の気に入りのブランドのものを。ケーキはこの紅茶に合うだろうと行きつけのパティスリーの新作を選んだのだ。

プレゼントは断られるが、この程度ならば巽は許してくれる。久米はケーキを口に運ぶ彼を眺めた。

巽はこういうアルバイトをしている学生らしくなく、所作が美しい。粗野な振る舞いをする生徒がほとんどな中、彼の気品は匂い立つほどだ。彼

の両親はすでに亡くなっているらしいが、きつとよくよく馴^しけられたのだろう。

舌も確からしく、合わない組み合わせを出す口にはしないが少しだけ微妙な顔をする。そして合う組み合わせだと機嫌が良く、さらに彼の好みに合えばその笑みはいっそう美しいものになる。久米はその顔を見るのが好きだった。

簡単なお茶の時間が終われば、あとはいつもの通り。

カップを置いて、久米はそっと目を閉じた。分かっているというように、柔らかな唇の感触が久米の口端に触れる。

久米たちはいつもこの戯れから始める。それが暗黙の決まりごとだった。

本当の所は口の端ではなくて唇に触れてほしいのだが、はじめての時に余計なことを言ったせいでずっとおあずけにされているのだ。

金銭が発生するセックスにおいて、キスを許容するかどうかは人による。久米は許容しない方だった。

真に心を通わせないセックスにおいて、キスというものはいささか重すぎると思っているからだ。ただ快楽を求めるだけならば、それは必要ない。そういう考えだった。

だからはじめての時に——その時はまだ、ここまで本気になるとは思っていなかった——その自論を語ったのだ。巽はそれにあっさりうなずと頷き——彼は客に無理を強いる人間ではない——それからずっと、彼の唇は久米のそこには触れなかった。

「巽くん……前に言ったことは忘れてください。だからキスを……あんっ

♡
」

久米がすべてを言い終える前に、巽は久米の胸に触れた。そこはシャツの上から分かるくらいに盛り上がって存在を主張していた。

「勃ってる。……期待してた？」

「……、あ、その……っ♡」

久米は恋を知ったばかりの乙女のように恥じらってみせた。

期待していた。していたけれど、それを口にするのは恥ずかしかった。

巽は久米の林檎りんごのように色づいた頬に口づけると、両手でそこを捏こね始めた。

「あ、ふあっ♡ あ……っ♡ んっ♡」

巽とこういうことをするようになってから更に敏感になったそこは、素直に快楽を拾う。甘い稲妻がもどかしく身体に広がる。

異とこうなる前も、何人か商売男・女を買ったことがある。久米はそれなりに資産家の親を持っていたから、その関係で「味わってみろ」と^{あっせん}斡旋された相手もいた。

彼らもまた、プロとしてけっこうな巧者だったと思う。無難に気持ちが良いくて、悪くはなかった。そう頻繁にやりたいものではないが、年に数度はリフレッシュとして楽しみたいな、と思う程度には。

元々、^{もともと}久米はあまり性欲が強くない。求められれば答えられるが、積極的なわけではない。セックスの技巧がそのまま社会的な評価に直結するから、己の評判を傷つけない程度にはできる、というだけ。自分から求めたことはほとんどなかった。セックスは嗜好品^{しこう}。それが久米の長年の考えだった。

だが異に出会ってから、『己は淡泊である』というものは思い込みであっ

たと知った。

彼に触られるとどこもかしこも気持ちが良くて、許されることならば毎日だって繋^{つな}がりたかった。

自分がこれほどに感じる事ができて、そして相手を求める心があることを、巽にはじめて教わった。

「ひ♡ つ、ん♡、…♡ あ♡♡ あ♡♡！」

布越しの刺激がもどかしくも気持ちがいい。トロ火でとろとろと煮込まれるように、ゆっくりと熱が上がっていく。

巽の手がぱっと離れて。そして可愛がられたことで、完璧にその形が浮き上がったそこを、マジマジと見つめられる。

「……♡」

彼に己の痴態を眺められているだけで、背筋がぞくぞくとする。

異はおもむろに腕を上げた。しかしギリギリのところで、触れない。あと少し、ほんの少しの距離で、指を止める。

肝心の刺激がなく、久米はふるふると震えた。「はやく」と口にしたいが、それもはしたない気がして口を噤^{つぶ}む。

もう待てない、と口を開こうとした瞬間。つんっ♡と指先で突かれた。

「あんっ♡!」

間拔けな声。かつ、と頬が熱くなる。

「すこし、まっ♡ ……♡ ああっ、あ♡、……あッ♡!」

服の上から、かりっ♡ かりっ♡ と引っかかれて、ドロドロと欲情した声が喉を抜ける。

「そ、れっ、あっ♡、ダメッ♡、く……っつう……ああっ……♡♡」

指先で摘まれて、ぐー♡ と引っ張られて、ぱっと手が離されて、甘や

かすように爪で引っかかれて、久米は仰け反った。

——カシャン。

机にぶつかって、ティーカップが小さな音を立てる。それに、はっ、と
我に返って、巽を潤んだ目で見た。

ベッドに移動したい。そこで愛されたい。

久米の気持ちを通じたのか、巽は立ち上がると久米の額にキスをして、
久米をベッドへといざなった。少しおぼつかない足を彼に支えられながら、
移動する。

少し離れた場所にソファ―ベッドがある。普段は正しくソファ―として
扱っているが、巽との予定がある日だけ、ベッドとして準備をしていた。

柔らかくベッドに腰掛けて、その横に巽が座る。

すぐに腕が伸びてきて、また久米の胸に触れた。

「く、あ♡♡、アっ♡ ひいんアっア、あ、……あ！」

きゅう♡ と摘まれて、ぴんっぴんっ♡ と弾かれて。布越しのもどかしい刺激に身を振る。^{よじ}

逃げるように身を引けば、それを咎めるようにばちんっ♡ と乳首を強く叩か^{たた}れる。

「ひ……っ♡♡ あああん……！」

体験版はここまで！

このあとは、先生視点で

・引き続き、乳首責めされたり♡

・窓がちよっと開いていて「見られてたらどうする？」とか言われながら責められたり♡

・主人公を描いた絵を正面に置かれて、汚したくなくて我慢させられたり



します♡

ぜひ製品版で続きを読んでください！

セックスが推奨される世界

Vol_4

2026年10月05日 初版

ここまで読んでいただきありがとうございます！
フォロー・評価・レビューなどいただけると励みになります♡

お時間がある方はアンケートに答えていただけると嬉しいです♡



<https://forms.gle/UywMW5di7Ry61Mdw6>

著者 茅積
発行元 夢の主人公攻め工房
連絡先 kayazumi.novel@gmail.com
サイト <https://kayazumi.fanbox.cc/>
X [@kayazumi_x](#)

※お取り扱いについて

本書の著作権は著者に帰属します。無断での転載、SNS等での共有、配布はお控えください。

Copyright © 2026 kayazumi All Rights Reserved.